

第一章 平和国家が揺らいでいる

1 カントは『永遠平和のために』を著した

柄谷行人 カントの永遠平和論を必要とする時代になった 022

加藤典洋 カントを援用して「国土防衛隊」を提唱する 026

梅原猛 憲法にはカントの理想が語られている 030

水島朝穂 なぜ著書の序文にカントの言葉を入れたか 034

2 戦争に向かう国家体制を危惧する

池内了 宇宙開発を歪める軍事利用 040

伊藤和子 戦争による人権侵害の加害者になるな 044

奥平康弘 市民社会に国家が介入し始めた 048

瀬戸内寂聴 戦時色の強まる空気がある 052

森村誠一 戦争のための三点セットが用意された 056

3 政治家の資質を問う

阿刀田高 政治家の言葉が貧しくなった 062

色川大吉 無能な戦前の政府に重なる現政権 066

加賀乙彦 日本の政治家には平和国家を築き上げる胆力がない 070

高村薫 首相は憲法を個人のオモチャにしている 074

鶴見俊輔 政治家は戦争の歴史から学べ 078

第二章 戦時の体験に学ぶ

1 軽々しく扱われた人間の命

金子兜太 爆死と餓死の島で「蹴戦」を誓った 086

水木しげる 熱病で苦しみ爆撃で片腕を失った 090

新藤兼人 クジで決まった戦死と生き残り 094

森光子 慰問の前線で特攻兵士を見送った 098

ちばてつや 凍りついた遺体はカラカラと音をたてた 102

海老名香葉子 家族六人を奪われた東京大空襲 106

高木敏子 母と二人の妹の遺体は見つからなかった 110

松谷みよ子 空襲のたびに防空壕に潜り込んだ 114

益川敏英 名古屋空襲で火の海を見た 118

林京子 こんな死に方は絶対に認めない 122

早坂暁 原爆は未来を殺す絶滅爆弾 126

松島トモ子 険の父はシベリアで抑留死 130

D・キーン 日本軍の暴虐が自決を招いた 134

2 戦争の準備は市民社会の統制から始まる

堀文子 決起した兵士に銃口を向けられた 140

野見山暁治 私服の特高警察に詰問された 144

森南海子 千人針は女の悲しい針目 148

司修 国は戦争画によって国民を騙した 152

大田堯 権力は教育を使って国民を同化させる 156

高橋哲哉 教育現場への管理強化は戦争への道 160

山中恒 国家は新聞社に「輿論指導」を通達した 164

むのたけじ	自己規制して書けなかった記者たち	168
田英夫	「風船ジャーナリズム」は権力者に好都合	172
原寿雄	「下から読む新聞」になってはいけない	176

第三章 永遠非戦の国であるために

1 軍事と安全保障を直視する

半藤一利	武装クーデターは軍隊が起こす	184
保阪正康	非軍事こそ平和につながる	188
堀田力	軍事力より警察力を発揮せよ	192
中村哲	爆弾の雨よりパンと水	196
前田哲男	軍拡の安全保障は時代錯誤	200
額綱厚	自衛隊は専守防衛型から外征型の武力組織になった	204

3 戦争をしない文化をつくらう

井上ひさし	へつるつる言葉になった平和を鍛え直す	256
小沢昭一	雄々しい戦争よりも女々しい平和	260
上田正昭	民衆同士による友好と連帯の歴史を取り戻せ	264
田中優子	戦争は人権と正反対にある	268
なだいなだ	常識ある賢い国になろう	272
日野原重明	戦争のない状態が最高の公衆衛生	276
なかにし礼	戦争ができる普通の国になろうとしてはならない	280
吉永小百合	原爆詩の朗読で紡ぐ平和	284
落合恵子	いのちのイデオロギーは折れない	288
中野晃一	若者が示したベクトルとしての平和主義	292

おわりに

辺見庸	日米同盟で米国に盲従する偽平和	208
内田樹	日米関係に正面から対峙せよ	212
白井聡	憲法より米国を重んじる政権	216
山室信一	「積極的平和主義」の実態は「軍事介入主義」だ	220
D・ラミス	強い軍事力を持つほど国民は危ない	224
J・ガルトウング	日本は平和国家ではない	228
大田昌秀	非武の島が基地の島になった	232
2	されど平和憲法	
伊藤真	戦争を想定した改憲草案は「壊憲」	238
無着成恭	「墨塗り」の愚を繰り返すな	242
小森陽一	「改憲」はアメリカの意向	246
澤地久枝	人類が最終的にいきつく答えが平和憲法	250

広岩近広 (ひろいわ・ちかひろ)

1950年大分県生まれ。電気通信大学電波通信学科卒業。1975年に毎日新聞社に入社。大阪社会部やサンデー毎日編集部で事件と調査報道に携わる。2007年から専門編集委員に就任し、大阪本社発行の紙面ルポ「平和をたずねて」で第22回坂田記念ジャーナリズム賞を受賞。著書に『被爆アオギリと生きる 語り部・沼田鈴子の伝言』『戦争を背負わされて 10代だった9人の証言』がある。2016年から毎日新聞客員編集委員。

わたしの〈平和と戦争〉
永遠平和のためのメッセージ

2016年6月10日 第1刷発行

編者—広岩近広

発行者—村田登志江

発行所—株式会社集英社

〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2-5-10

電話 03-3230-6100 (編集部)

03-3230-6080 (読者係)

03-3230-6393 (販売部) 書店専用

印刷所—大日本印刷株式会社

製本所—ナショナル製本協同組合

定価はカバーに表示してあります。

Printed in Japan

ISBN978-4-08-771640-5 C0036

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁(本のページ順序の間違いや抜け落ち)の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。また、業者など、読者本人以外による本書のデジタル化は、いかなる場合でも一切認められませんのでご注意下さい。